

## 第3章

# 大塔・田ノ浦の歴史と文化財



大塔・田ノ浦の位置

### この地域の小中学校

小学校：大塔小学校、早岐小学校

中学校：日宇中学校、早岐中学校

### 第3章 大塔と田ノ浦の歴史と文化財

#### 開発の進むまち

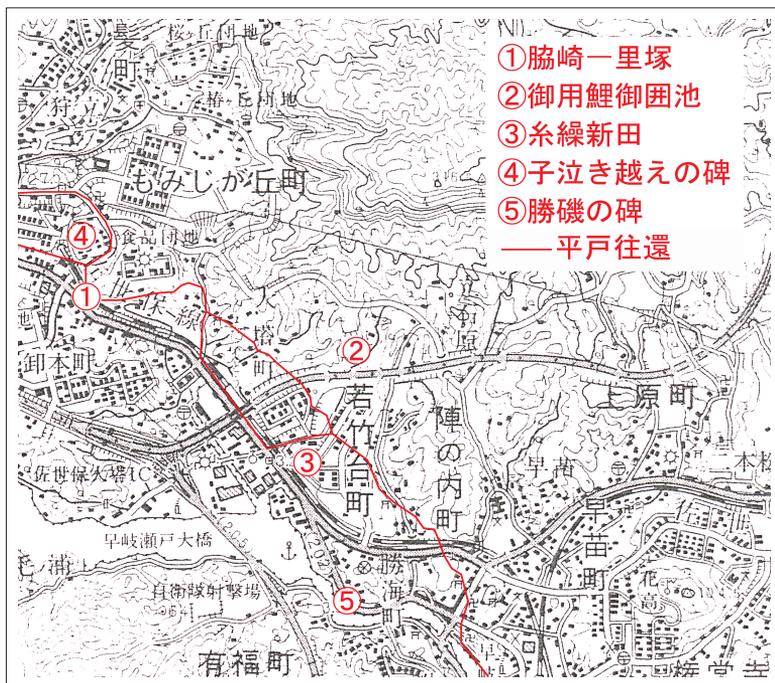
この地域は、古くは日宇村の一部です。卸団地から若竹谷団地あたりまでになります。江戸時代以前は、山林と早岐瀬戸に続く低地や湿地が広がっていました。これは、「田ノ浦」という地名の由来にもなっています。江戸時代の後半になると、これらの湿地は埋め立てられて、新田が造られました。

また、地区のほぼ中央には平戸往還(街道)が通っています。江戸時代は、この平戸往還に沿って農家が点在する、寂しい土地だったようです。

ところが、第2次世界大戦後に国道が広くなり、バイパスや西九州自動車道が開通すると、沿線に工場や大型店舗、団地が次々にできて賑わうようになりました。この地域は、佐世保市街地の入口にあたり、商工業地帯や住宅地としての役割が強まったからです。



大塔・田ノ浦遠望



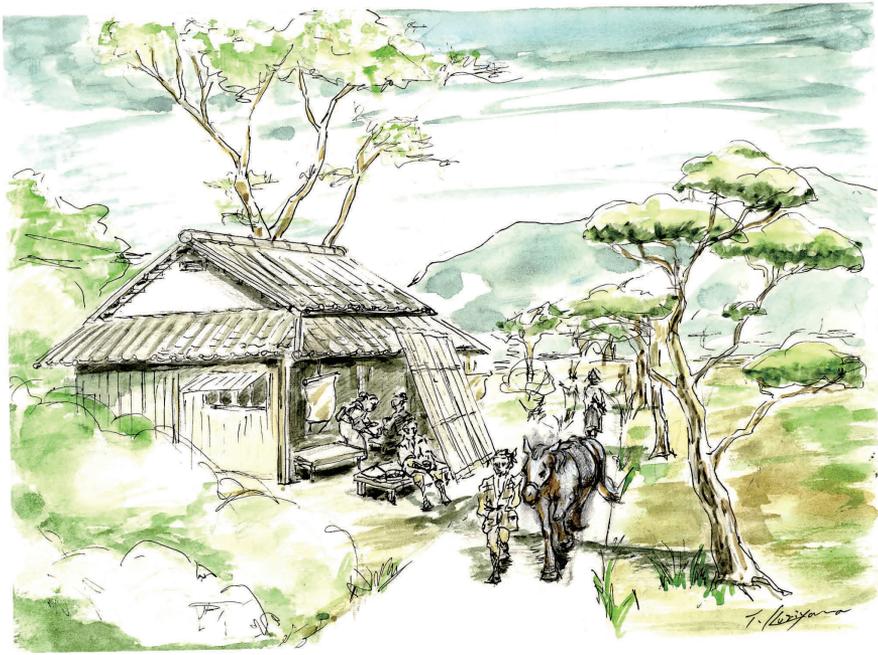
- ① 脇崎一里塚
- ② 御用鯉御団池
- ③ 糸繰新田
- ④ 子泣き越えの碑
- ⑤ 勝磯の碑
- 平戸往還

大塔・田ノ浦の地図

## 脇崎の榎茶屋

日字を抜け、榎ヶ丘団地の東の山を越えてきた平戸往還(街道)は、卸団地入口から大塔町の山際に沿って、クネクネと曲がりながら若竹台団地を越え、早岐の徳丸墓地を抜けて早岐の町中に入ります。

その卸団地入口は、古くは脇崎と呼ばれ、一里塚と茶屋がありました。平戸往還を行き来する旅人たちが、お茶を飲んだり、簡単な食事をとったりして休憩した所です。茶屋の脇に大きな榎の木があったことから、「脇崎の榎茶屋」と呼ばれていました。



脇崎の榎茶屋と往還を通る人々

イラスト：栗山泰文

平戸往還は、平戸から東彼杵を経て、長崎を結ぶ江戸時代の主要道路です。幅はわずか1間(約1.8メートル)ほどで、道の両側には松が植えられていました。また、1里(約4キロメートル)ごとに、道しるべである一里塚が設けられています。塚は、土を盛ったものが普通でしたが、中には石を積み上げて塚にしたものもあったようです。ほとんどの一里塚には、目印となる木が植えられていて、塚の傍らにはたいい茶屋がありました。

この脇崎の一里塚より佐世保側には藤原町、早岐側には、早岐1丁目のホテルファーストイン早岐の所に、一里塚がありました。

茶屋は、1898年(明治31)の鉄道開通の頃には廃業したようです。また、1955年(昭和30)頃までは、一里塚と覆の木だけは残っていましたが、国道の拡張工事で無くなってしまい、今は記念碑しかありません。



脇崎一里塚跡

御用鯉御囲池

普段の平戸往還は、一般の人たちの往来や、荷物の運搬に使われていましたが、平戸藩主が領内の巡視や<sup>1</sup>参勤交代、<sup>2</sup>長崎勤番の時にも通っています。

そのため、藩主の宿舎である本陣や、家臣たちの宿舎である脇本陣が、佐世保市内では江迎、中里、佐世保、早岐に置かれていました。藩主が宿泊するのは本陣に限ったことではなく、<sup>3</sup>庄屋の家に宿泊することもあったそうです。



御用鯉御囲池

田ノ浦町には、藩主の食事を作るお抱え料理人の松尾氏が、1856年(安政3)に造った「御用鯉御囲池」が残っています。この池では、早岐や佐世保の本陣に藩主が宿泊したときに、食膳に出すための鯉を養殖していました。時には、平戸まで運んだこともあったそうです。

この池は、平戸往還から少し離れた谷の湧き水を利用したもので、長さ20メートル、幅8メートルの砂岩の切り石を組み合わせて造った、立派な石囲いの池で、佐世保市の文化財に指定されています。池の脇には、松尾氏の家の跡があります。

- 江戸幕府が全国の大名の力を抑えるため(お金を使わせるため)に1年毎に江戸と領地を行き来させたこと。
- 幕府の直轄領であった長崎を警備するため、近隣の諸藩主が交代で出張すること。
- 村の長。関東では名主、東北では肝煎と呼ぶ。村の自治一般を担当する。

## 大塔と田ノ浦の新田開発

大塔駅付近から大塔バイパス一帯は、昔は湿地や干潟が広がっていましたが、1665年(寛文5)に折原孫左衛門が干拓して、新田に変えました。その東、田ノ浦から早岐の境までは、その後に折原牧三郎が干潟を干拓して新田を造っています。この新田は、約2ヘクタールの広さがありますが、工事の資金が不足して、妻が糸繰り(織物のための糸作り)をして資金を稼いだそうです。そのため完成した新田は、「糸繰新田」と呼ばれました。



糸繰新田方面を望む

## 昔ばなし～子泣き越～

大塔町にあるさつき台団地の一角、子供たちの遊び声が響くさつき台幼稚園のすぐそばに、高さ1.3メートル、幅60センチメートルほどの石碑が建っています。この石碑は昔から「子泣き越の碑」あるいは「こがのこえの碑」と呼ばれてきました。この碑には次のような悲しい昔ばなしが伝わっています。



子泣き越の碑

昔、この辺りには、平戸往還から分かれた小さな道が通っていました。

ある日の日暮れ、用事があって隣村に出かけていた女の人が、一人でこの道を通りかかりました。すると、突然道の脇の草むらから男が飛び出し、いきなり女の人を斬り付けたのです。男は、人を殺して持ち物を奪おうと待ち伏せていたのです。

たまたま通りかかった哀れなこの女の人、一撃で絶命してしまいました。ところが、この女の方は、臨月近い妊婦だったので、斬られた途端に「オギャー」と大きな産声を上げて赤ん坊が生まれ落ちました。

この思わぬ事態に驚いた男は、何も盗らずに逃げていきましたが、赤ん坊の泣き声だけがいつまでも聞こえていたということです。

この石碑は哀れな母子の供養碑として建てられたと伝えられ、今でもこの昔ばなしを知る人が花やお供え物を供えています。

コラム～勝磯の碑～

早岐田子ノ浦のバス停の少し北側に、「勝磯」という地名がある。この地名は、広田城の戦い(第9章広田参照)のときに、平戸松浦氏の援軍がここに上陸し、大村方の軍勢を撃退したことに由来する地名といわれている。

そして、1904年(明治37)に起こった日露戦争の時には、日本陸軍の先発隊がこの地より秘かに出発し、朝鮮半島の仁川に向かっていて、先発隊を率いた木越少将は地元のお婆から地名の由来を聞き、「幸先よし」と勇んで船に乗り込んだという。

現在、勝磯の地にはそのことを記念する石碑が建てられている。(現在の石碑は、戦後に再建されたもの。)



勝磯の碑

ちいき ねんびょう  
地域の年表

時代	出来事
江戸時代	
1665年頃(寛文5頃)	糸繰新田ができる。
1856年(安政3)	御用鯉御囲池ができる。
近代	
1898年(明治31)	鉄道開通。大塔駅開業。
1904年(明治37)	木越旅団が勝磯より出陣。日露戦争がおこる。
1927年(昭和2)	日宇村と佐世保市の合併で佐世保市の一部となる。
1928年(昭和3)	勝磯の碑(初代)が建てられる。
現代	
1964年(昭和39)	勝磯の碑が再建される。
1996年(平成8)	西九州自動車道大塔インター開通。